

望月町文化財調査報告書 第10集

春日尾崎遺跡

1983・3

東信土地改良事務所
望月町教育委員会

例 言

- 1 本書は、昭和57年8月、望月地区県営ほ場整備事業の施行に伴い、春日尾崎遺跡が煙滅するため、東信土地改良事務所の委託を受け、望月町教育委員会が事前に発掘調査を実施した調査報告書である。
- 2 遺構の実測は、近藤尚義、福島邦男が行ない、その補助を福島茂子が行なった。
- 3 写真撮影は、遺構・遺物とも福島邦男が行なった。
- 4 遺物の洗浄は、平林さだが、注記は福島茂子が行なった。
- 5 遺物の復元及び実測は、佐藤敏、近藤尚義、福島邦男が行なった。
- 6 図版トレースは、近藤尚義が行ない、図版作成は福島邦男が行なった。
- 7 本文の執筆は次のとおりである。

第1章 福島邦男

第2章 福島邦男

第3章・第1節 近藤尚義

第2節 近藤尚義

第3節 近藤尚義

第4節 近藤尚義

第5節 近藤尚義

第6節 福島邦男・近藤尚義

第7節 福島邦男・近藤尚義

第4章 森嶋 稔

- 8 遺物及び諸記録は、望月町教育委員会が保管している。
- 9 本書の作成業務は、望月町教育委員会が行なった。

目 次

例言

第1章 調査の動機と経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査団組織	1
第3節 調査日誌	2
第2章 春日尾崎遺跡の地理的及び歴史的環境	4
第3章 遺構及び遺物	6
第1節 第1号住居址	6
第2節 第2号住居址	9
第3節 第3号住居址	9
第4節 第4号住居址	11
第5節 第5号住居址	11
第6節 第1号孤状集石遺構及び第2号土壇	11
第7節 第1号土壇及びピット群	13
第4章 総括	18

挿 図 目 次

第1図 春日尾崎遺跡位置図及び周辺遺跡分布図(1:10000)	5
第2図 春日尾崎遺跡グリッド配置図及び遺構全体図(1:300)	7
第3図 第1号住居址実測図(1:40)	8
第4図 第2号住居址・第3号住居址・第4号住居址・第5号住居址実測図(1:60)	10
第5図 第1号孤状集石遺構及び第2号土壇(SK-02)実測図(1:40)	12
第6図 第1号土壇(SK-01)及びピット群実測図(1:60)	13
第7図 第1号住居址出土遺物(1:3)	14
第8図 第1号住居址出土遺物(1:3)	15
第9図 第4号住居址出土遺物(1:3)	16
第10図 第4号住居址(36、38~45)、第5号住居址(46)、第1号土壇(47~52)、第3号 (36~41、1:4、42~56、1:3)	17

表 目 次

第1表 春日尾崎遺跡周辺分布図…………… 4

図 版 目 次

第一図版	1. 春日尾崎遺跡全景	2. 第1号住居址
第二図版	3. 第1号住居址カマド	4. 第1号住居址貯蔵穴
第三図版	5. 第1号住居址配石	6. 第1号住居址遺物出土状態
第四図版	7. 第1号住居址遺物出土状態	8. 第1号住居址遺物出土状態
第五図版	9. 第1号住居址遺物出土状態	10. 第2号・3号住居址
第六図版	11. 第4号住居址	12. 第1号孤状集石遺構
第七図版	13. 第2号孤状集石遺構	14. 土壇及びピット群
第八図版	15. ピット2(上)、ピット3(下)	16. ピット5
第九図版	17. 第1号住居址出土遺物	18. 第1号住居址出土遺物
第十図版	19. 第1号住居址出土遺物	20. 第4号住居址出土遺物
第十一図版	21. 第4号住居址出土遺物	22. 調査風景
第十二図版	23. 調査風景	24. 調査風景

第1章 調査の動機と経過

第1節 調査に至るまでの経過

春日尾崎遺跡緊急発掘調査は、昭和57年度望月地区県営ほ場整備事業の施行に伴う事前調査の3遺跡の中の1つである。すでに本地区においては、昭和55年度・新水A遺跡、新水B遺跡、昭和56年度・金塚遺跡の発掘調査が実施されており、内容の濃い成果を挙げている。この先昭和58年度には、本地区の県営ほ場整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査は、一応終了の見込みとなりそうである。

本遺跡は、すでに信濃史料・第1巻に「尾崎遺跡」として記載があり、平安時代の遺物が出土したことを伝えているが、昭和55年には確認の意味も含め、遺跡詳細分布調査を実施し、改めてその重要性を指摘した。この調査の時、字名が桂ノ久保であることを知り、遺跡名を字名によらず、地元で使っている俗称で与えたことが解かった。しかし、協和地区にも「尾崎」なる地名があり、混同を防ぐために「春日尾崎遺跡」とした。

昭和56年に入って長野県教育委員会より、昭和57年度県営ほ場整備事業にかかわる埋蔵文化財の照会があった。次いで、7月20日には、長野県教育委員会、東信土地改良事務所、望月町役場建設課、望月町教育委員会により現地協議を行ない、調査の構成、予算等の概要について話し合う。昭和57年1月には、「国宝重要文化財等保存整備補助事業計画書」の提出を行なう。4月22日には、「国宝重要文化財等保存整備事業補助金交付申請書」の提出、5月20日には、「昭和57年度春日尾崎遺跡発掘調査について(届)」の提出を行なう。この間、調査員の委嘱、地元作業員の公募等を行ない、8月18日は、調査現場の抜根を行ない調査に入った。

第2節 調査団組織

顧問	森嶋 稔	(日本考古学協会々員・上山田小学校教諭)
団長	福島 邦男	(日本考古学協会々員・望月町教育委員会学芸員)
調査員	渡辺 重義	(長野県考古学会々員・軽井沢町文化財専門委員)
"	佐藤 敏	(長野県考古学会々員・佐久考古学会々員)
"	近藤 尚義	(長野県考古学会々員・立正大学々生)
"	神津 敦	(長野県考古学会々員・佐久考古学会々員)

作業員 桜井卯作、倉見渡、関嘉津武、吉沢浩矣、吉沢弥太郎、大森英七、福島茂子、日暮信生、永井健蔵、土屋貴高、桜井宗次、大森徳太郎、渡辺郷、永井一民、岩間岩一郎、内藤昭宏、岩下あや子、中山ふみ子、桜井きぬ子、上野知一、永井徳弥、小林孝一、大森一尾。

調査協力者 鈴木高、柳沢右三郎（以上望月町文化財調査委員）、新津開三、本牧小学校歴史班、株式会社竹花組、春日保育所。

調査事務 （社会教育係）大森睦男（係長）、高橋重雄、上野早苗、花岡一子、小林辰男、福島邦男、平林一郎（福祉センター係）。

見学者 大沢洋三、窪田俊朝（以上望月町文化財調査委員）、望月町民。

第3節 調査日誌

8月18日（水） 晴れのち曇り

株式会社竹花組の協力を得て、調査現場の桑の木の抜根を行なう。

8月19日（木） 曇り

調査現場へ器材の搬入とテントの設営を行ない、結団式を挙げる。午後からグリッド（3m×3m）の設定を行ない、引き続きグリッド掘りを開始する。すでにカマドと思われる焼土が確認される。

8月20日（金） 晴れのち雷雨

大変良い天気の中、午後3時過ぎになって突然雷雨が到来し、調査現場は水びたしになった。本日は、合計17グリッドを掘る。

8月21日（土） 晴れのち雷雨

昨日と同様に、夕方になって激しい雷雨にみまわれ、一時帰路につけない程であった。本日は11グリッドを掘る。住居址と思われる落ち込みが検出され、また、土師器、須恵器の坏、甕が出土する。

8月22日（日） 晴れ

本日現場調査を休みにする。整理作業は調査本部にて実施する。

8月23日（月） 晴れ

本日のグリッド掘りと確認調査により、4棟の住居址と思われる落ち込みを確認する。このうち南西部で検出されたものを第1号住居址とする。他に土壙や焼土の検出があった。

8月24日（火） 晴れ

今まで検出された落ち込みの確認作業と第1号住居址の掘り込み作業を行なう。第1号住居址では、カマドが北側で検出され、また、土師器の甕なども出土する。

8月25日（水） 晴れ一時雷雨

グリッド掘りと第1号住居址の掘り下げを行なう。第1号住居址では、プランのほぼ全容が明らかとなる。一時激しい雷雨にみまわれた。

8月26日 (木) 曇り

第1号住居址の掘り込みがほぼ終了し、清掃作業に入る。調査区東側の斜面より集石が検出され清掃を兼ねて掘り込む。第1号土壌とピットの掘り下げを行なう。

8月27日 (金) 曇りのち晴れ時々雨

第1号住居址の清掃、第2号・3号住居址の掘り込みを行なう。グリッド掘りも進める。

8月28日 (土) 晴れ

第1号住居址の土壌掘りと全体の清掃、写真撮影、第2号・3号・4号住居址の掘り込みと清掃、写真撮影、集石の掘り込みを行なう。第4号住居址は、水が湧き出し大変な作業となる。

8月29日 (日) 晴れ

本日現場作業を休みにする。調査団本部にて遺物整理は継続して行なう。

8月30日 (月) 曇り時々雨

第4号住居址の掘り込みと集石の掘り込み、集石のやり方を組む。

8月31日 (火) 晴れ

第1号住居址、集石遺構の実測、第2号、3号住居址の写真撮影を行なう。また、第4号住居址の掘り込みが行なわれ、奈良時代、平安時代の須恵器の坏、甕が比較的多く出土する。

9月1日 (水) 晴れ

第4号住居址の掘り下げ、第1号住居址の遺物の取り上げ、孤状集石遺構と集石の実測を行なう。第4号住居址からは、8世紀から9世紀の須恵器を中心とした坏、甕が相変らず出土する。

9月2日 (木) 曇りのち晴れ

第4号住居址の掘り下げ、清掃、写真撮影、実測、再度第2号・3号住居址の写真撮影。第1号集石遺構の実測、第1号孤状集石遺構の清掃及び写真撮影を行なう。

9月3日 (金) 曇り

第1号孤状集石遺構の断面実測、第1号孤状集石のやり方組み、本遺跡の遺構全体測量を行なう。

9月4日 (土) 曇りのち晴れ

第1号孤状集石遺構の実測

9月5日 (日) 晴れ

本日作業休み、遺物整理を本部にて行なう。

9月6日 (月) 曇りのち雨

第1号孤状集石遺構の実測、各図面の点検を行ない、本日で現場調査を終了する。

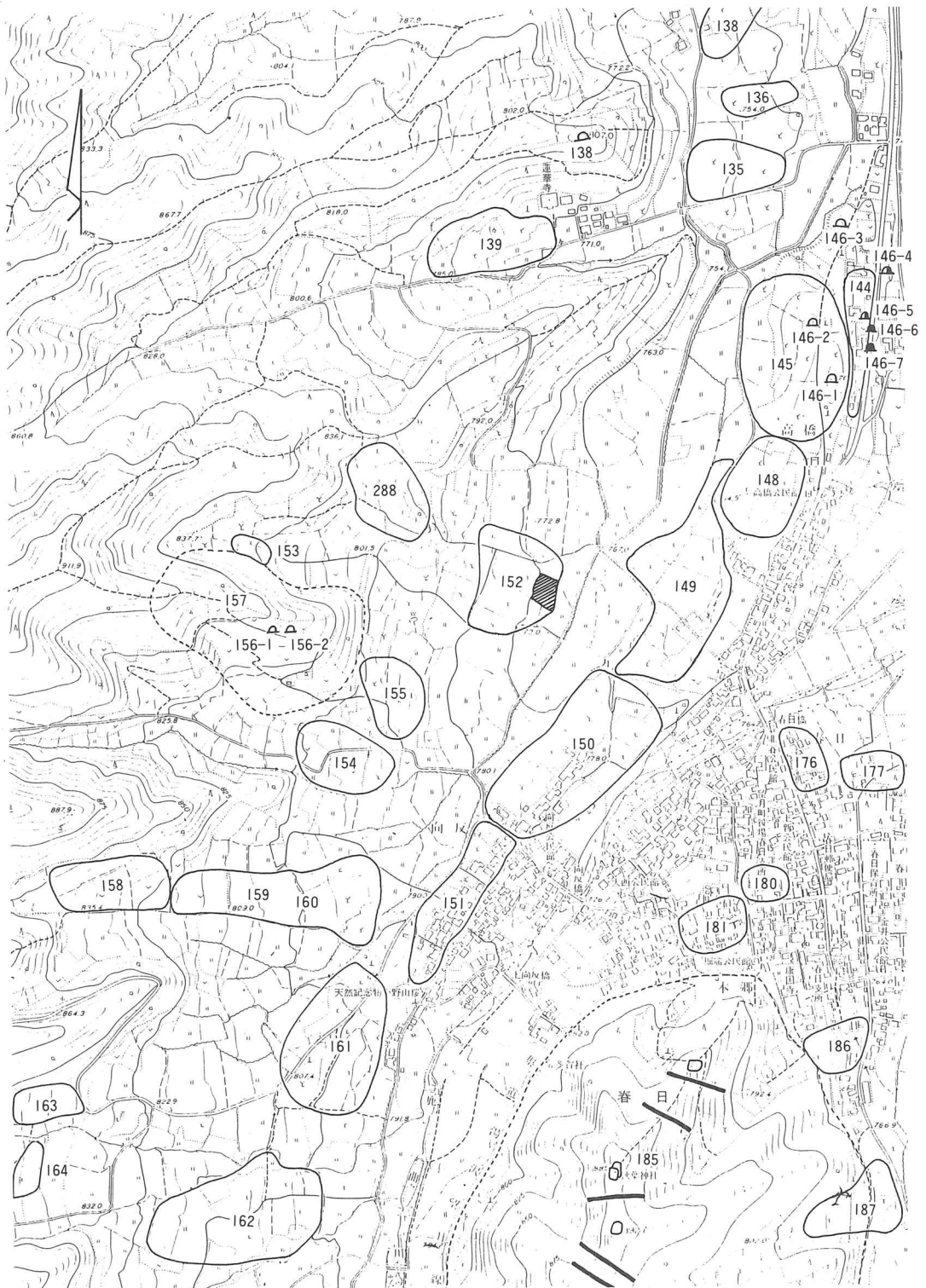
第2章 春日尾崎遺跡の地理的及び歴史的環境

春日尾崎遺跡は、春日街道沿いに建ち並ぶ高橋地籍の家並みから西方約400mの、西側から東側に傾斜する緩傾地の桑畑に位置している。ここは、鹿曲川で形成された沖積面より20m程高く、蓼科山の裾野の一角に当たり、標高770mを測る。

ここ一帯の裾野には、水量はそれ程多くないが何箇所かに湧水が存在し、幾筋となく小河川を作り、東向き斜面を下っている。これらの湧水は、かつては斜面を削り、なだらかな沢状の地形を形成し、あるいは土砂の押し出しにより小規模な扇状地状の地形を作っている。春日尾崎遺跡を含め、この付近一帯の裾野の麓を立地条件としている遺跡は、このような地形の微高地状の部分にくまなく分布しているといえる。

第1表 春日尾崎遺跡周辺の遺跡分布表（望月町遺跡詳細分布図による）

町遺跡番号	遺跡名	大字	小字	町遺跡番号	遺跡名	大字	小字
135	善郷寺A遺跡	春日	善郷寺	153	柱久保遺跡	春日	柱ノ久保
136	善郷寺B遺跡	"	"	154	栃久保A遺跡	"	柳ノ久保
137	善郷寺C遺跡	"	"	155	栃久保B遺跡	"	"
138	姫塚古墳	"	別府久保	156-1	栃久保第1号古墳	"	"
139	別府遺跡	"	別府	156-2	栃久保第2号古墳	"	"
144	長戸遺跡	"	長戸	157	栃久保城跡	"	"
145	金塚遺跡	"	金塚	158	知能遺跡	"	知能
146-1	金塚第1号古墳	"	"	159・160	浦谷A・B遺跡	"	浦谷
146-2	金塚第2号古墳	"	"	161	浄永坊遺跡	"	浄永坊
146-3	金塚第3号古墳	"	"	621	大門先遺跡	"	大門先
146-4	金塚第4号古墳	"	長林	163	北入遺跡	"	北入
146-5	金塚第5号古墳	"	"	164	春日山寺A遺跡	"	山寺
146-6	金塚第6号古墳	"	"	176	新小路遺跡	"	新小路
146-7	金塚第7号古墳	"	"	177	宮裏遺跡	"	宮裏
148	池田遺跡	"	池田	180	春日支所敷地遺跡	"	金井
149	後沖遺跡	"	後沖	181	堀端遺跡	"	堀端
150	松原遺跡	"	松原	185	春日城跡	"	ゆる久保、法幢寺城久保、駒込、小庭
151	向反遺跡	"	向反	186	法幢寺遺跡	"	法幢寺
152	春日尾崎遺跡	"	桂ノ久保	187	小庭遺跡	"	小庭



第1図 春日尾崎遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 (1:10000)

一方、本遺跡東側の低位な水田地帯の向いは、浄永坊付近から春日尾崎遺跡の位置する裾野と分岐し、尾根状台地を発達させている。砂礫層が中心の西側斜面に対し、ここは、全く礫が混入していない黄色ローム層が堆積しており、土壤の差違が明瞭に表われている。この台地には、縄文早期から後期までの大規模な遺跡が余す所なく存在しており、さらに南方に続く竹之城までを含め、「春日縄文式時代遺跡群」と名付けている。昭和56年に発掘調査を実施した金塚遺跡もその一つで、縄文早期の住居址3棟が検出されている。

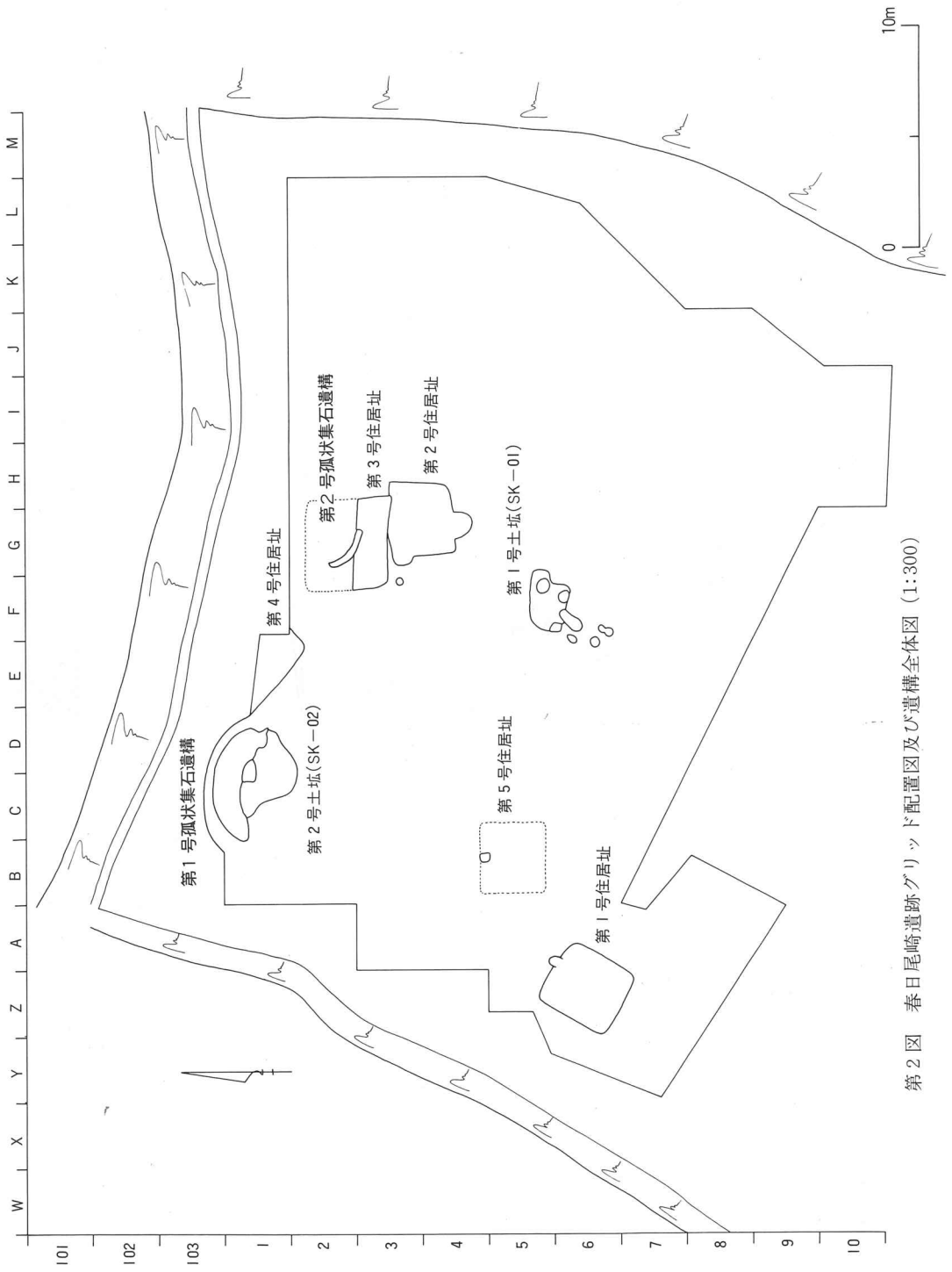
本遺跡で検出された奈良時代から平安時代にかけての過渡的様相を示す遺構及び遺物、あるいは平安時代初頭の遺構及び遺物は、本地域周辺ではまだ確認されておらず、初めての発見であったが、浅科村との境界に近い望月町牧布施地区において、宮久保第1号・2号住居址、岩井第2号住址^(註6)で、これらの時期に迫る遺構及び遺物が出土している。他に見られる遺跡は、いずれも10世紀以降のものである。但し、平安時代の遺跡は、望月町全体で201箇所を数え、各時代を通じて圧倒的多数を誇っている。次いで縄文時代中期の125遺跡である。時代や時期によって地域的な分布の片寄りはあるが、平安時代にあってはほぼ全域に分布しているといえる。本遺跡は、その中であって数少ない遺跡のひとつであり、この地域における同時期の研究の重要な指標ともなりうるものである。

第3章 遺構及び遺物

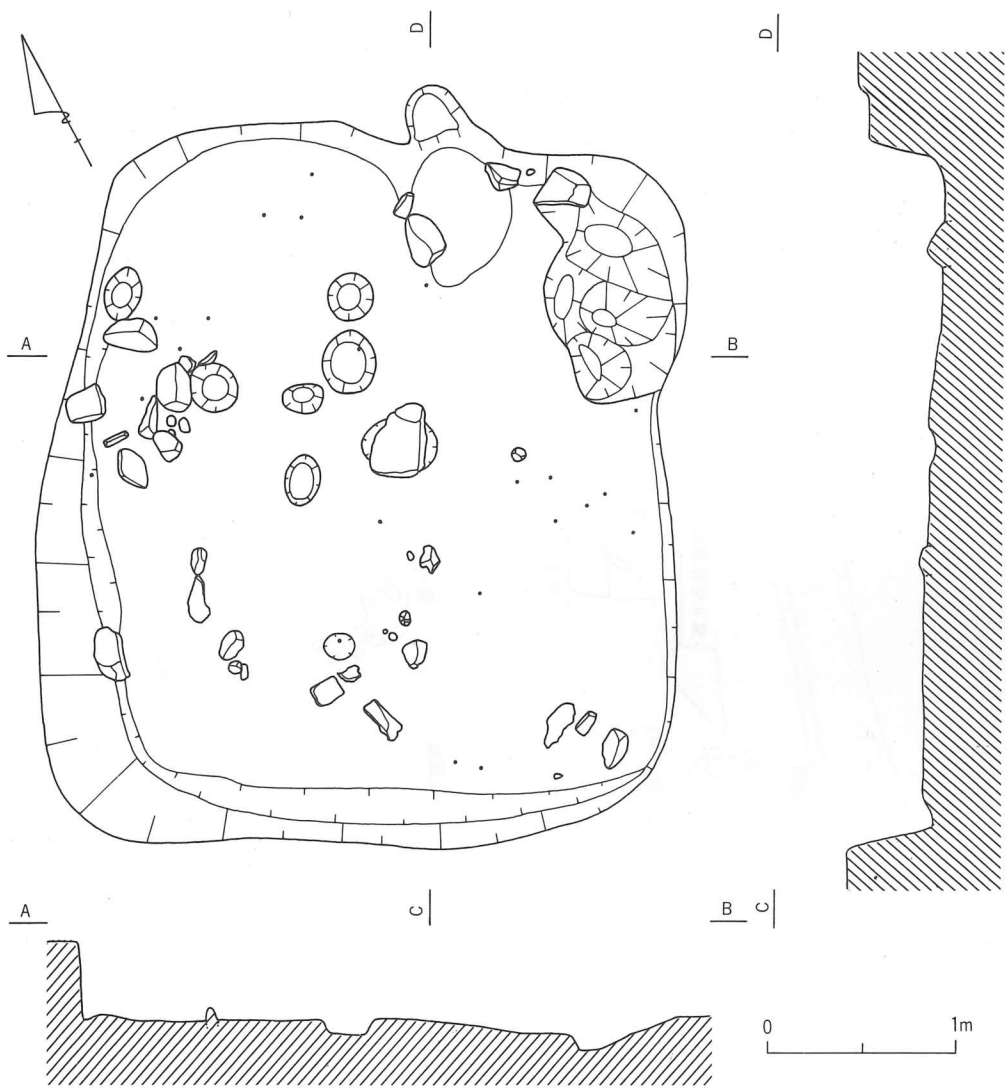
第1節 第1号住居址

遺 構 (第3図・第1・2・3図版)

本住居址は、調査区南西部の東向き斜面上方で検出された隅丸方形の竪穴住居址である。プランは、東西400cm、南北210cmを測り、主軸は北東方向を指す。本址は、斜面を切り込んで構築されており、当然西側が深く40cm、最も浅い東側で3cmを測る。東側部分は耕作により削平された部分も存在する。カマドは、住居址北壁面の中央よりやや東側に寄った所に位置している。石組が基調となり、そこに粘土を貼っている。いわば石組と粘土との併用のカマドである。残存する西側袖石はほぼ原位置、東側袖石は、カマド東側に位置する土壌に流れかれた状態で検出された。内部は赤く焼け、焚口部には焼土と炭が厚く堆積していた。床面における焚口部からの焼土と炭の広がりには広範であり、住居址東側コーナーから中央部にまで達していた。床面はかなり固く締っており、タタキを成したのではないかと考える。また部分的に小礫がはまり込み、凹凸の激しい部分も見られたが、全体に平坦であった。壁面はほぼ垂直に立ち上がっており、かなり固い印象であったが、タタキはないものと思われる。柱穴は、住居址内部に合計7個検出されており、壁際からやや内側に入った所に位置し、極めて浅く不煎いである。カマドの東側に当たり、北東



第2図 春日尾崎遺跡グリッド配置図及び遺構全体図 (1:300)



第3図 第1号住居址実測図 (1:40)

コーナー部直下に、ほぼ楕円形の土壇が検出されている。土壇内部からは、土師器の坏や甕片が多量に出土するとともに、焼土や炭が厚く堆積していた。貯蔵穴的な性格というよりも、灰捨場として機能をはたしていたのではないかと考えられる。東南コーナーから西南コーナーにかけて、壁に沿いながら浅い周溝が巡らされていた。北西の壁面の中央から北方向に、比較的大きな石が6個床面上に存在していたが、施設であるかどうかは疑問である。

遺物 (第7・8図 第3・4・5・9・10図版)

本址より出土した遺物は、カマド中より土師器の甕の胴部破片、また、カマドの袖の粘土中より同様甕片が出土している。カマドの西脇には、刀子状の鉄製品が出土している。床面からは、土師器の完形の内黒坏、甕の口縁部及び胴部、また、カマドからかき出された焼土や灰の中から土師器の坏や甕の破片が多く出土している。土壌の中からは、焼土や灰に混って土師器内黒坏のほぼ完形品や甕片が多数出土、また、西壁に貼り付くように土師器甕の大片が出土している。

本址の遺物は全て土師器であり、破片が大部分を締めていたが多量の出土をみた。これらの遺物から、本址は平安時代前半のものと考えられる。

第2節 第2号住居址

遺構 (第4図 第5図版)

本址は、調査区の北寄りで検出された方形の竪穴住居址であり、北側に続く第3号住居址と複合関係をもっており、第2号住居址・第3号住居址の順に新旧関係がわかっている。本址は、北側の一部が第3号住居址に切られている。規模は、東西310cm、南北300cmを測り、第1号住居址と同様斜面を切り込んで構築しているため西側が高く18cmを測り、東側の低位な部分は壁が存在していなかった。床面はやや固く締っており、凹凸が多少認められたがほぼ平坦であった。床面は全体的に地形と同一方向に、やや傾斜していた。柱穴は、床面上には検出されず、住居址の西側に1個検出されているが、木址に伴うものかどうか確認はできない。カマドは、はっきりとした形態をとっておらず、北西コーナーに近い西壁部が一部焼けている様相を残すのみであった。

遺物

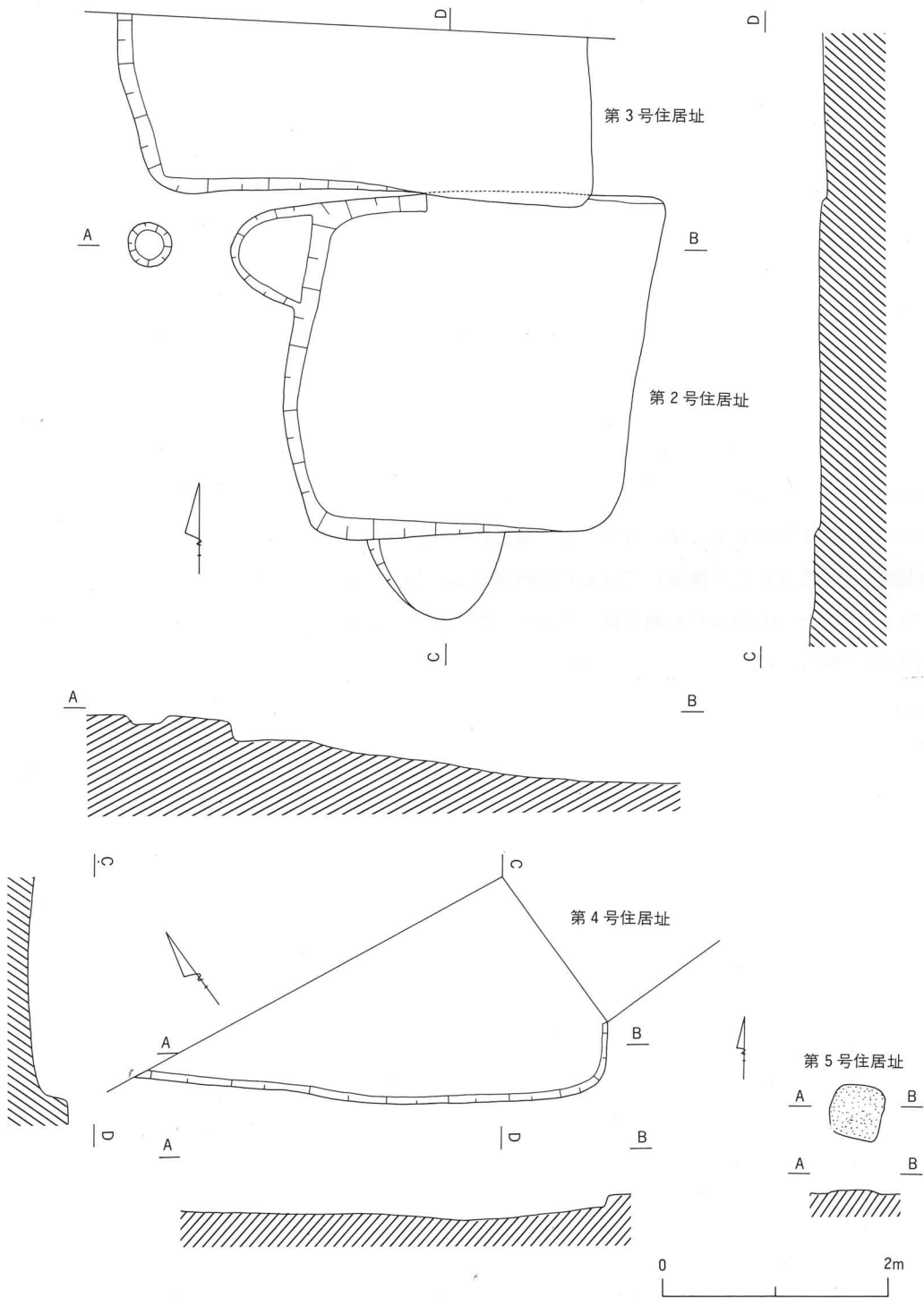
住居址内より、土師器と須恵器の坏片と甕片が少量出土しただけであり、図上復元可能なものはなかった。

第3節 第3号住居址

遺構 (第4図 第5図版)

本址は、第2号住居址の北側に位置し。プランの南側の一部が第2号住居址を切っている。新旧関係は上記した通り、第2号住居址→第3号住居址となる。また、プランの中央部から北側は、調査不可能な地域であったため全容を把握することができなかったが、ほぼ方形のプランであったと思われる。東西は417cm、壁高は最も高い部分で12cmを測る。壁は比較的なだらかな立ち上りを見せている。東側部分は、斜面下方ということもあって、ほとんど存在していない。床面は湧水のため詳細に観察はできなかったが、斜面に沿ってわずかに傾斜していた。

遺物



第4图 第2号住居址、第3号住居址、第4号住居址、第5号住居址实测图 (1:60)

須恵器の坏蓋片、甕片が少量出土しただけであった。

第4節 第4号住居址

遺構 (第4図 第6図版)

本址は、調査区の北側で、第2号・3号住居址の北西寄りに検出された。本址北側には農業用水が流れ、また土手が築かれているため、プランの一部が検出されただけであった。プランの形態や規模は、推定で一辺4 m前後の方形に近いものと考えられる。壁高は、最も高い部分で21cmを測り、垂直に近い立ち上がりを見せている。住居址内には激しく湧水が流れ込み、床面の詳細な観察ができなかった。

遺物 (第9図 第10図36~41、第10・11図版)

本址からは、破片が主体ではあったが、図上復元可能なものが目立った。土師器糸切り底の坏及び内黒の高台付碗、甕、須恵器糸切り底の坏、へらおこし底の坏、高台付坏、坏蓋が主なものである。特徴は、糸切りの技法とへらおこしの技法をもつ坏が、同一住居址内で出土したことであり、内黒高台付碗や須恵器の四耳壺片(40)などからみて古い要素もあるが、平安時代中葉のものかと思われる。

本址は、限定された部分の調査であり、しかも湧水の流れ込む最悪の条件であったため、全体の遺物を刻明に把握することはできなかったといえる。

第5節 第5号住居址

遺構 (第4図)

本址は、耕作等によりほとんどが破壊され、カマドの一部が残存するだけであった。

遺物(第10図46)は、カマドより須恵器坏口縁部片が1片出土しただけであった。

第6節 第1号孤状集石遺構及び第2号土壇

遺構 (第5図・第6図版)

第1号孤状集石遺構及び土壇は、第4号住居址の西側で、しかも調査区の北端で検出された。双方の遺構は、互に関連する同一の施設であるのか、あるいはそれぞれが独立した遺構で、切り合いを成しているかは現状では把握することはできないが、遺物の出土状態からみて、同一期の所産であると考えた方が良さそうである。孤状集石遺構の規模は、東西440cm、南北84cmを測り、人頭大から拳大までの礫を比較的厚く積み上げ、半円形に構築している。これらは、東西250cm、南北380cm、深さ25cmを測る土壇の北側と東側をまわるように位置している。土壇内部には、85×

68cm、厚さ30cm程の上面が扁平の大礫が存在している。

遺物

出土遺物は、孤状集石遺構から、土師器の坏、内黒坏、甕、須恵器の坏などの破片、土壙からは、須恵器の坏、土師器の内黒坏などの破片が出土しているが、それぞれ量は少ない。

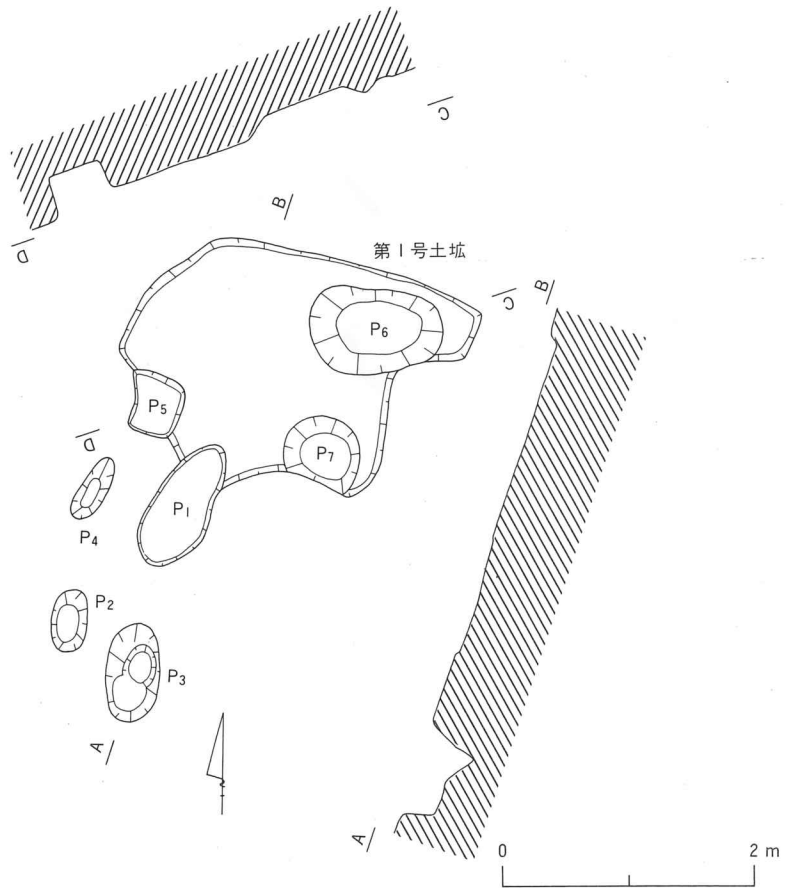


第5図 第1号孤状集石遺構及び第2号土壙（SK-02）実測図（1：40）

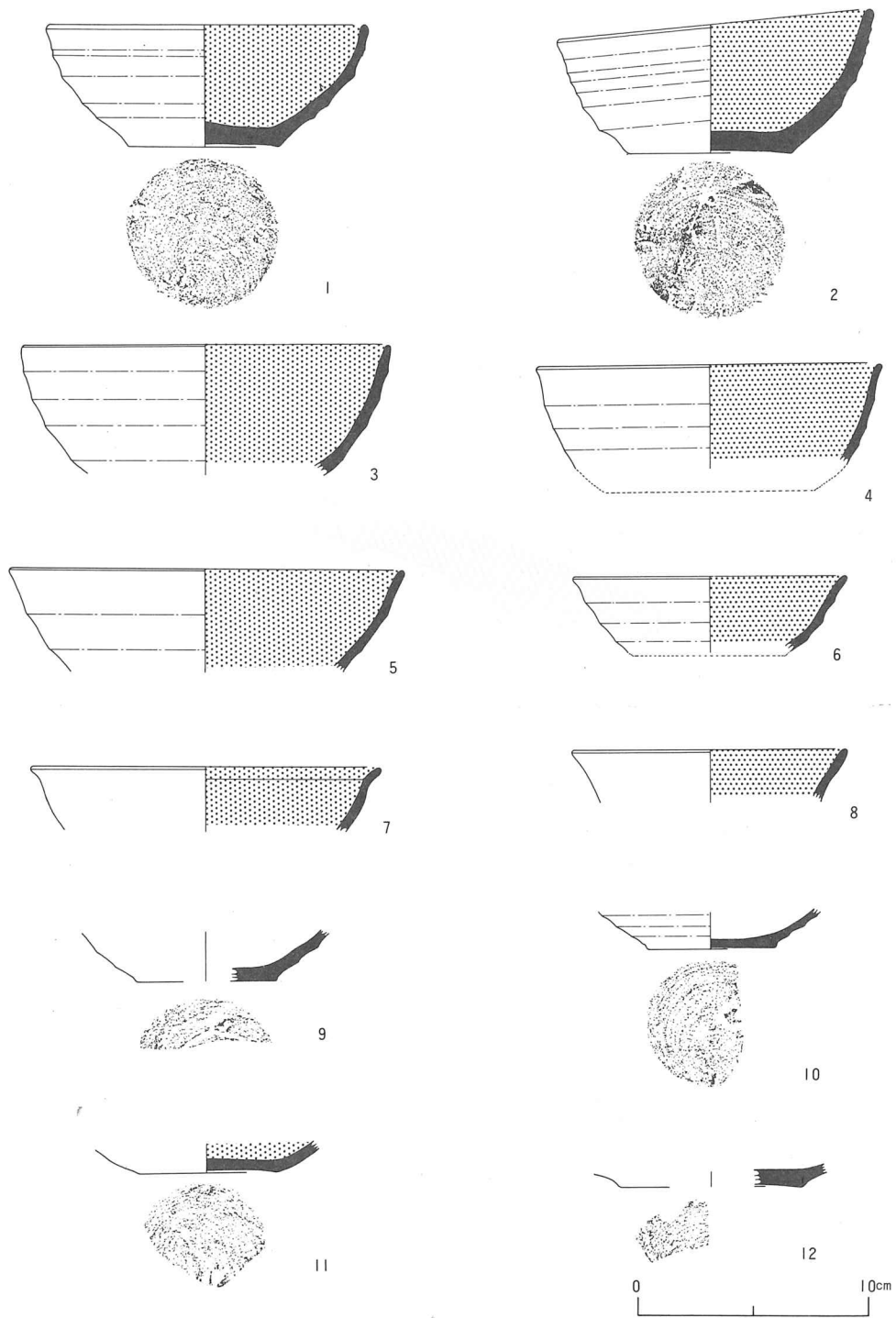
第7節 第1号土壇及びピット群

土壇及びピット(第6図)は、調査区のほぼ中央部で検出された。土壇の平面形態は不正円形を呈しており、規模は、東西に290cm、南北に180cmを測り、かなり規模の大きなものである。深さは、最深部で7cm、最浅部で4cmと、平面規模に比べればかなり浅い。床面は、比較的平坦であり、ほぼ水平である。土壇内には、焼土と灰が一面に入り込んでおり、これに混って土師器内黒坏、甕、須恵器の高台付坏、甕などの破片が出土した。

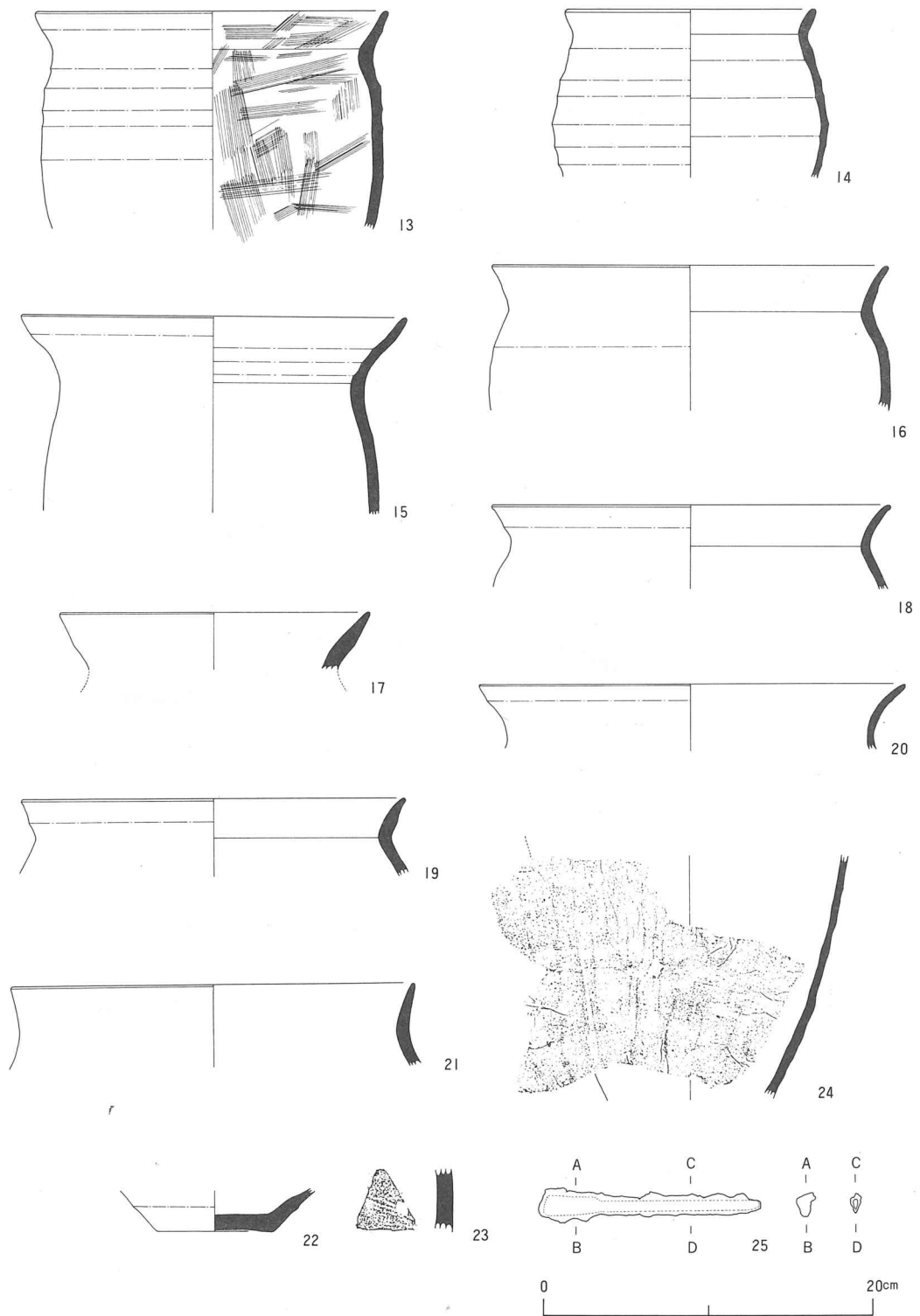
ピット(第6図)は合計7個検出され、このうちP₆とP₇は土壇内に、P₁とP₅は土壇の掘り切り部に、P₂~P₄は土壇との複合関係をもたずに検出されている。それぞれ土師器及び須恵器の小片が少量ずつ出土しているだけである。(第10図)



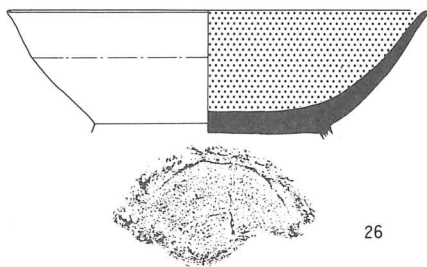
第6図 第1号土壇(SK-01)及びピット群実測図(1:60)



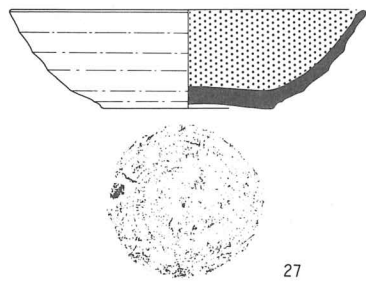
第7図 第1号住居址出土遺物(7、8、9カマド内)(1:3)



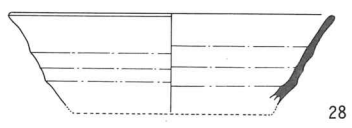
第8図 第1号住居址出土遺物(14、18、19、21カマド内) (1:3)



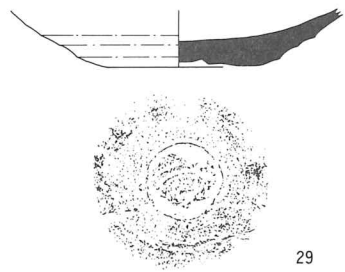
26



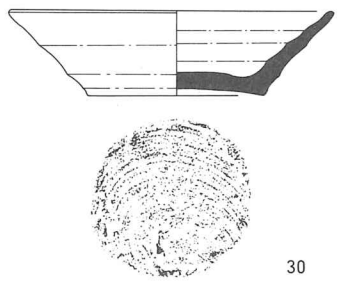
27



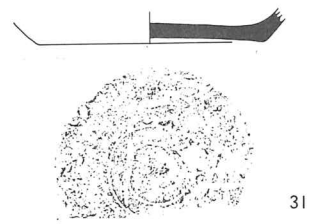
28



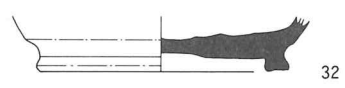
29



30



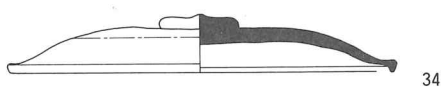
31



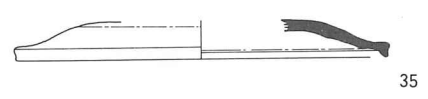
32



33



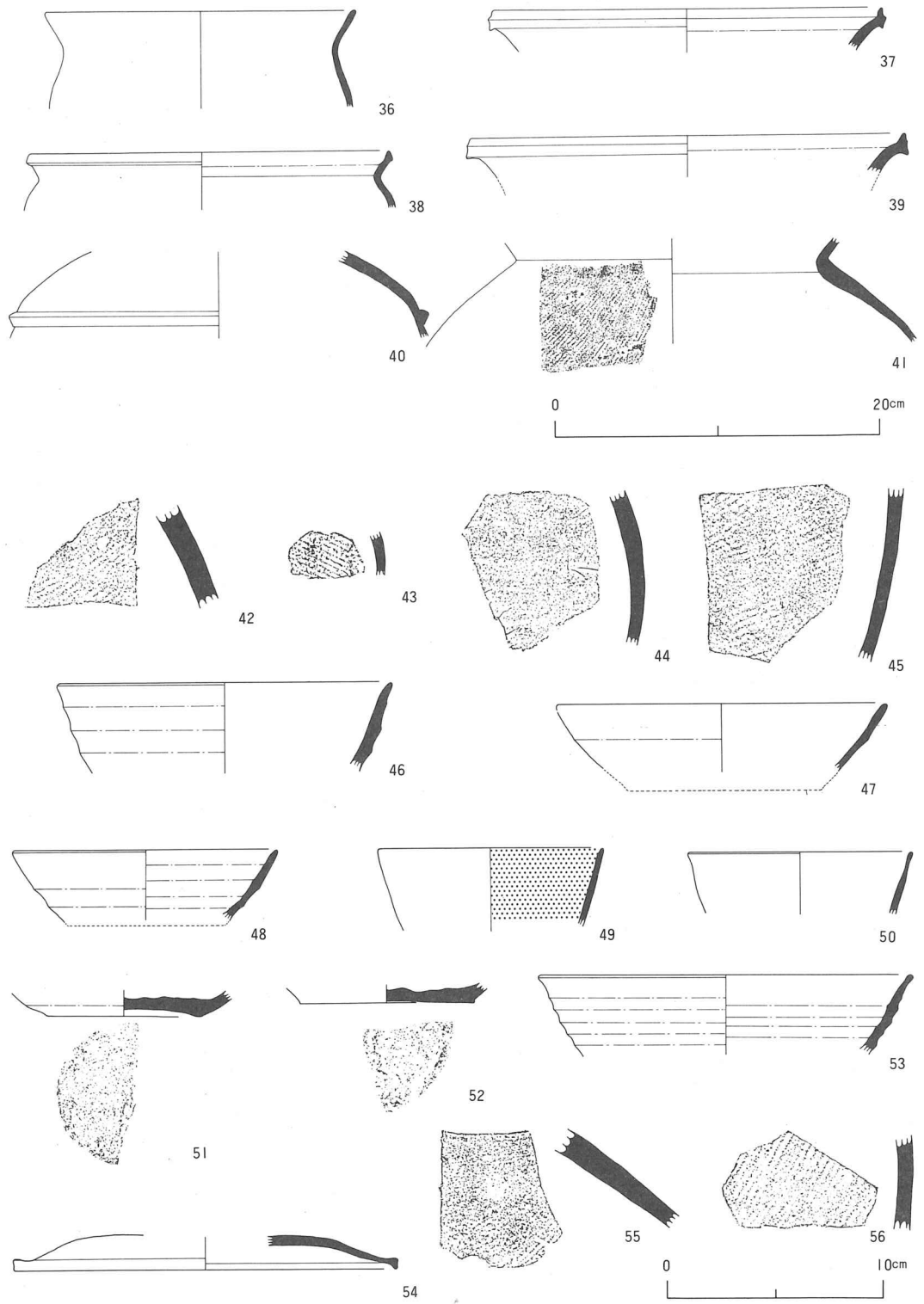
34



35



第9図 第4号住居址出土遺物 (1:3)



第10図 第4号住居址(36、38~45)、第5号住居址(46)、第1号土壇(47~52)
 第3号ピット3(53~56) [36~41・1:4、42~56・1:3]

第4章 総括

『続日本紀』の、文武天皇4(700)年3月17日の項に「令諸国定牧地放牛馬」「諸国をして牧地を定めさせ牛馬を放たしむ」がある。これが、官牧に関する記載の初見である。次いで弘仁14(823)年9月24日には、信濃諸牧の貢馬についての記事が初めて登場し、(『日本紀略』)更に『延喜式』の左右馬寮』の「御牧」には、甲斐、武蔵、信濃、上野国の御牧名がみえる。望月牧もここが初見である。ならんで、信濃は80疋中、望月牧は20疋を出すように定められている。16牧で80疋、望月牧で20匹であるから、15牧は60匹、1牧が平均4匹ということになる。望月牧は他の御牧よりも五倍の生産力があつたことになる。信濃国の牧監は、筑摩郡埴原牧田六町を公廩田として与えられたという。『類聚三代格』延暦16(797)年の記事、そして天長元(824)年の牧監を一人減したという記事、そして天安2(858)年再度一名としたとの記事がある。当初、おそらく一名であつたであろうから、埴原牧、そしてやがて2名となり、埴原牧と4分の1の生産力をあげる望月牧とに、そしてもう一度埴原牧(824年)一人に、更に858年2人となり埴原と望月の牧におかれたであろうことは、ほぼ間違いない事実であろうと思われる。824年以前には望月牧に、時には国司と同格位の牧監がおり、牧監庁が存在したことは明らかである。9世紀中葉以降それは確実に位置づいていくとみるべきである。

望月を中心とするこの立科そして浅科の準平地帯は、8世紀から9世紀にかけて一つの大きな高揚の時期をむかえている。御牧ヶ原周辺のこの時期の須恵器の大窯業遺跡群、そして望月のみに限定しても200箇所以上のぼる平安時代資料を出す遺跡群、そしてまだその存在をうかがわせるだけではあるが、天神反の布目瓦出土地(牧監の氏寺か)などは、その高揚した地域の総合遺跡群としての顔つきを見せている。しかしまだ調査はその緒についたばかりであつて、望月牧監庁の存在を思わせるところは、今のところまったくの推測の域を出ていない。

春日尾崎遺跡は、立科山麓に食い込み、北流する鹿曲川にのぞむ西斜面にあり、数本の小沢あるいは小湧水の間に形成された尾根状微高地に位置している。

小面積の調査ではあつたが、ほぼ平安時代前半の住居址を主体とする遺跡があつた。それはまさに、望月牧の時代の集落遺跡であると見ていい。小規模の検出例からみれば、まだこの遺跡としては、その中心部に至っていないかのようにも見れるが、今後の課題の一つであろう。

住居址は5棟検出されているが、第1、4号址は $W-26^{\circ}-N$ 、第2、3、5号址がほぼ $N-0^{\circ}-N$ で真北を指して遺築されている。平面プランの方向性から見れば、2グループに分けられるが、第1号址と第4号址では、第1号址の方が若干先行するかもしれない程度で、ほぼ同時期であろうか。1号址の土師坏(7)と4号址の(26)とはおそらく共通する灰釉陶器埴に範形をもつものであつて、中葉をさかのぼり得ないように思う。しかし第1号址の1~6など、須恵器に範形

のあるやや深めのものであり、第4号址のものは概して浅く、小形のものが多く時期的にはやや新しい要素である。この種の四耳壺(40)もやはり、中葉へ下るものであろうか。須恵の坏蓋や高台付の坏そして糸切りへら整形の土師坏の底や、一点へらおこし例もあるが、古い要素もあるが混入と見た方が妥当であろう。そうすると1号址と4号址は近接した時間の中にあるが、若干の時間差がある。しかしむしろ若干の時間差があるけれども、ほぼ同時期のものと考えても間違いではないように思われる。

第2、3号住居址は若干の切り合いによって、3号址の方が2号址より新しいことが明らかであるが、第5号住居址の推定主軸の方向と同一であるとの前提に立つならば、第10図46例からすれば、第1号址以前かとも思われる。とすれば、この春日尾崎遺跡では、 $N-0^{\circ}-N$ 方向の規格は平安前半の古い要素であり、平安中葉の新しい住居址の平面プランは $W-26^{\circ}-N$ とかたむきを示しているということになる。注目しておきたい現象である。しかし、資料の増加がほしい。

孤状集石遺構と土壙の問題はなかなか容易でない。第1号址は下部構造としての土壙と、上部構造としての孤状集石とみることができようが、第2号址の方は住居址上部であるので、時間的位置を3号住居址以降と与えることができるが、それ以上のことは明らかにならない。

大同3(808)年(『類聚三代格』)の記事によれば、信濃国の御牧は左馬寮に属し、荘田184町5反253歩が与えられている。算術計算では望月牧には46町以上の荘田が必要であり、そこには、天長4(827)年の太政官符では1,000余匹、貞観18(876)年には2,274匹が信濃の御牧に馬が居たとの記録があるので、すくなくとも250~568匹以上は望月牧に馬がおり、水田があったことになるのではないかと思われるので、今後、こうした検証がどうしても必要ではなからうか。

春日尾崎遺跡も、そうした検証の中を、確実に有力な資料として埋めて行くことになるものと期待している。

蛇足ではあるが、牧監庁跡やそれに附属する諸施設、格(馬柵)、湟(堀)などの検出も、集落、生産関係遺跡と共に追求されねばならないと思う。

(森嶋)

註

- 註1 福島邦男 1981 「新水—長野県北佐久郡望月町新水A・B遺跡緊急発掘調査中間報告書—」 望月町教育委員会
- 註2 福島邦男他 1982 「金塚—蓼科山北麓における縄文式早期・平安時代の調査—」 望月町教育委員会
- 註3 信濃史料刊行会 1956 「信濃史料」第一巻上
- 註4 福島邦男、渡辺重義 1981 「望月町遺跡詳細分布調査報告書」 望月町教育委員会
- 註5 註2と同じ 春日縄文式時代遺跡群とは、蓼科山から北に延びる裾野の平坦部を立地条件とし、春日竹之城から、向反、下の宮地籍までの範囲をいう。縄文早期から晩期までの各時代の遺跡が分布しており、特に早期の竪穴住居址や、中期初頭の集落址が貴重である。また、縄文時代の遺跡に限らず、古墳群や4世紀の住居址、平安時代の小規模な集落址なども存在し、埋蔵文化財の重要な包蔵地である。
- 註6 宮久保第1号・2号住居址、岩井第2号住居址の報告書は、1983年度に刊行の予定である。

圖 版



1、春日尾崎遺跡全景



2、第1号住居址



3、第1号住居址カマド



4、第1号住居址貯蔵穴



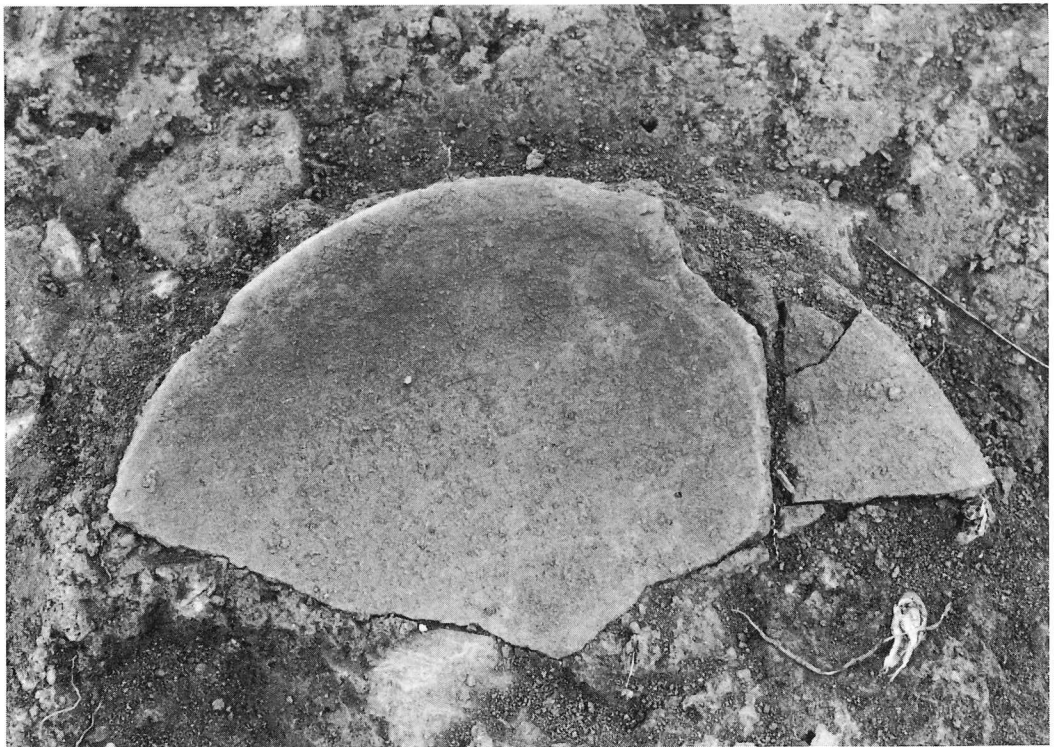
5、第1号住居址配石



6、第1号住居址遺物出土狀態



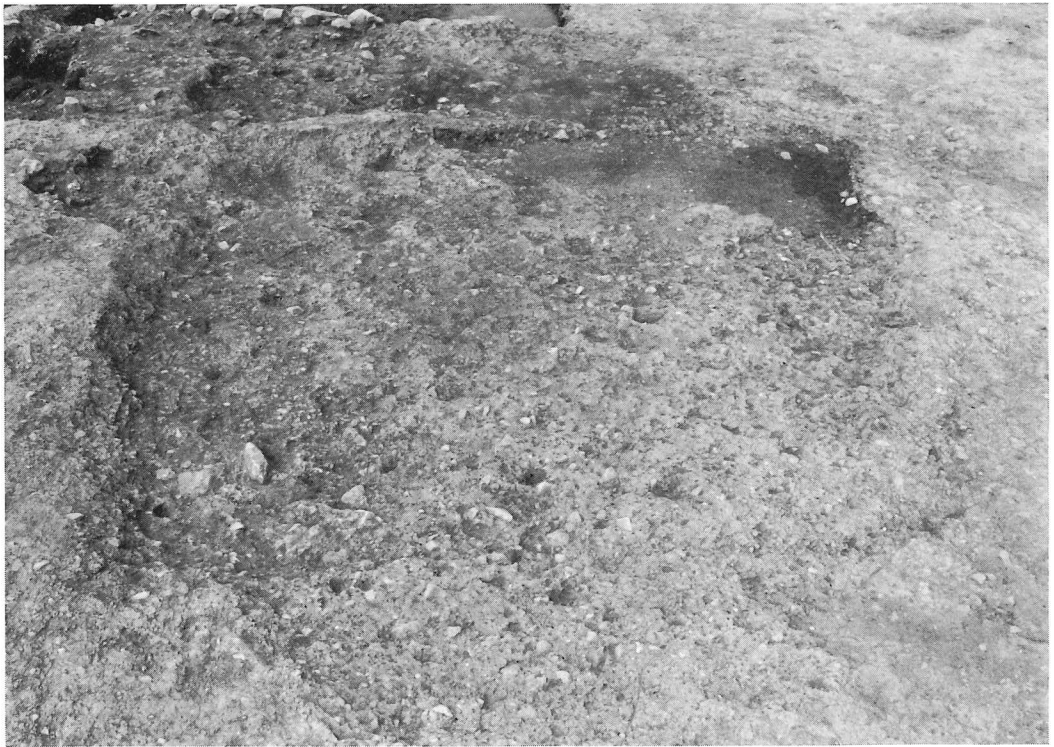
7、第1号住居址遺物出土狀態



8、第1号住居址遺物出土狀態



9、第1号住居址遺物出土狀態



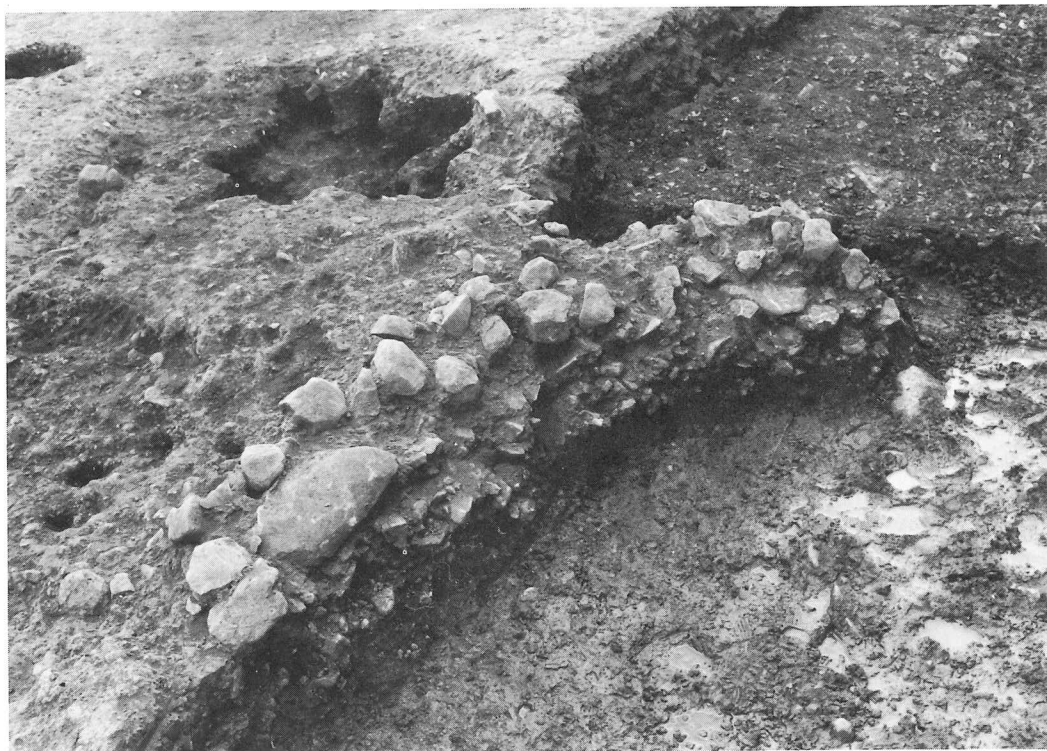
10、第2号・第3号住居址



11、第4号住居址



12、第1号孤状集石遺構



13、第2号孤状集石遺構



14、土壇及びピット群



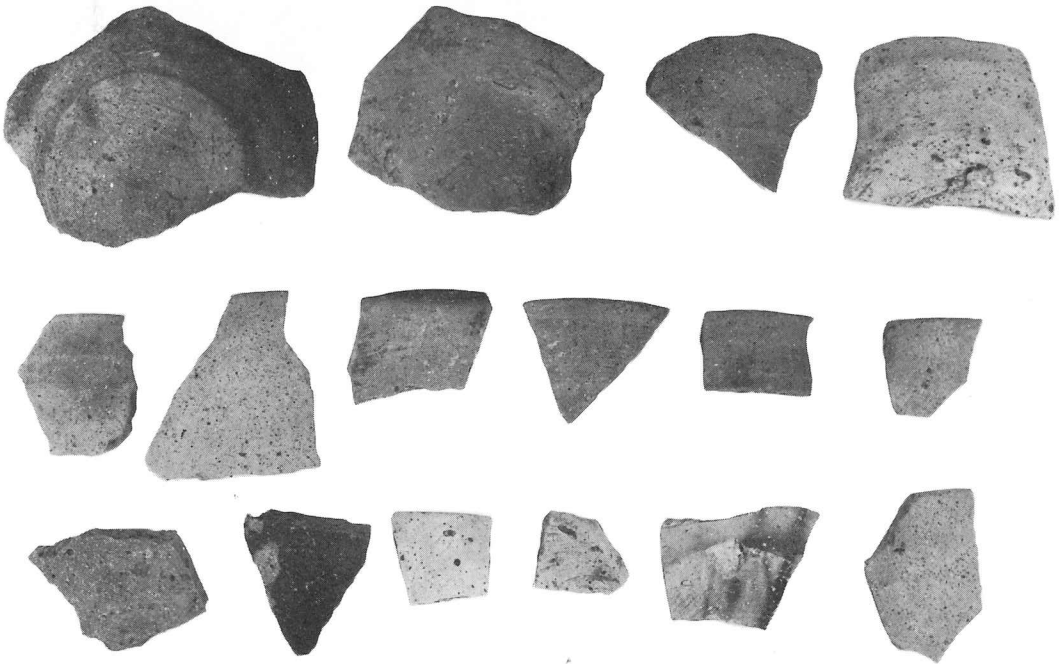
15、ピット2(上)・ピット3(下)



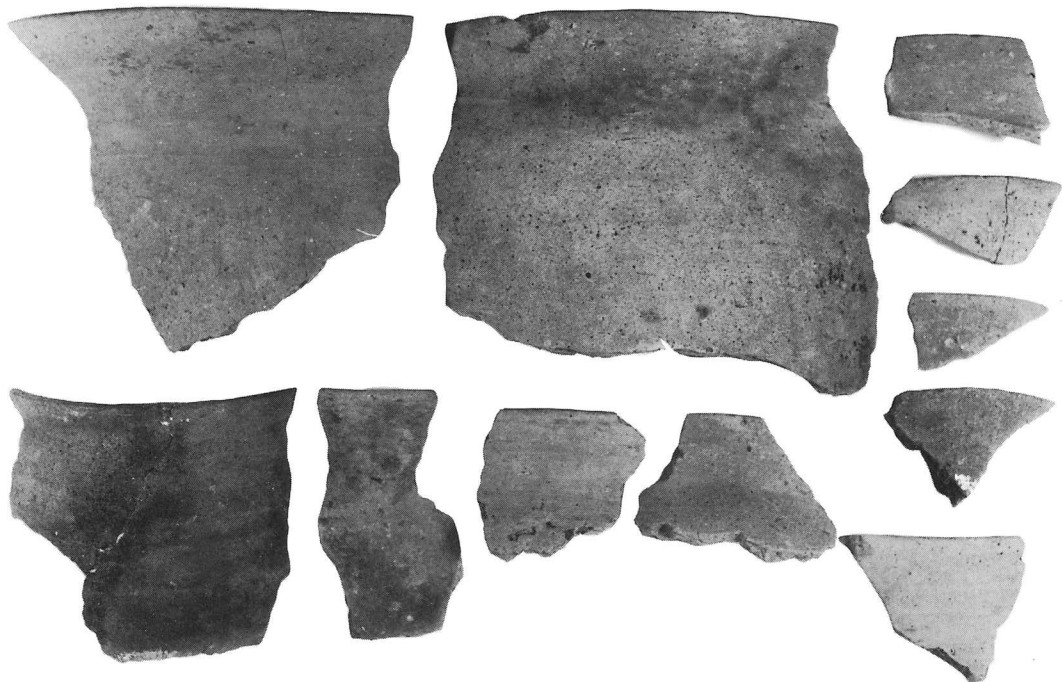
16、ピット5



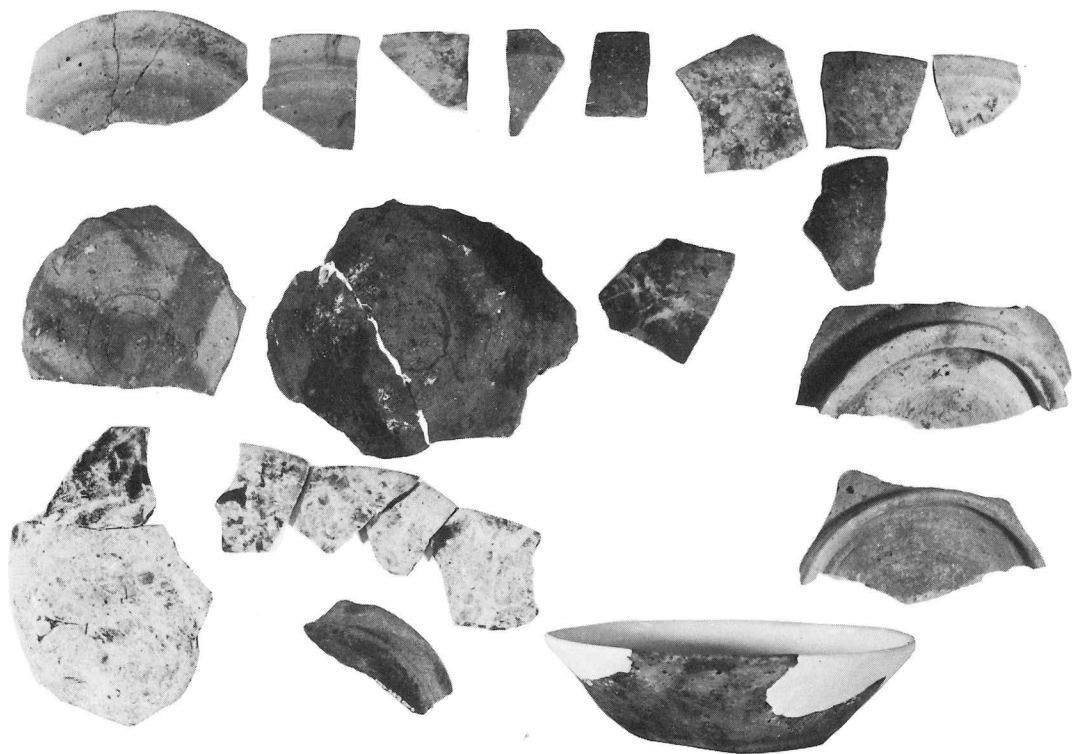
17、第1号住居址出土遺物



18、第1号住居址出土遺物



19、第1号住居址出土遺物



20、第4号住居址出土遺物



21、第4号住居址出土遺物



22、調査風景



23、調査風景



24、調査風景

望月町文化財調査報告 第10集

春日尾崎遺跡

発行 1983年3月20日

東信土地改良事務所

望月町教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社
